



ほうき星へのきっかけ

本田 実



昭和5年11月下旬、毎日新聞に次のような広告があった、三省堂の広告であった。

クロモシ리즈 彗星の話 神田 茂著

そのころ天文の本の広告なんて、めったに新聞にのることなどなかったし、その数年前から星が好きになって望遠鏡を手製したりして星に親しんでいる私にとっては見のがすことのできない広告であった。

私の住んでいるところは、鳥取県の中国山地の真中で戸数が20戸に足らない小さな集落でその村の端に私の生家はある。

新聞の広告の本がほしくて、近くに書店があるわけではなく、入手する方法はただ一つしかなかった。部落から約10キロほど離れたところにある郵便局まで行って振替を組んで注文することであった。

定価20銭の本を注文するのに往復20キロの道を歩いた。

注文してから10日たった、本が到着したのは12月12日であった。

あとで思えばこの本は運命的な「彗星」との出会いであったようであった、そして神田先生との出会いでもあったようである。

通読、再読、三読して深く私の心をとらえたのは次のような、8~9頁にかけての文章であった。

——近年に於ては何処の国に於て最も多く彗星が発見されつつあるか1910年から1930年9月までに発見された142個の彗星について国別の統計を示すこととしよう。

北半球	総計	110		
内訳	北米合衆国	33	日本	3
	ドイツ	30	イギリス	2
	フランス	20	イスパニヤ	1
	ロシア	11	イタリア	1

ポーランド	4	デンマーク	1	
エジプト	4			
南半球	総計	32		
内訳	南アフリカ	20	南アメリカ	4
	濠州	8		

中略 アメリカの富豪ドノホーの寄附によって1890年以来米国太平洋天文学会の委員から予期しなかった彗星の発見者に銅牌を贈っている、邦人でドノホー賞牌を贈られたのは水沢の山崎正光氏一人のみである。

日本で発見された彗星は前表の様に3個である、第一は1919年10月に京都帝国大学助手佐佐木哲夫氏が彗星捜索中に発見したのが、後にフィンレー周期彗星と判明したもの、第2は1920年5月テンペル第2周期彗星出現の時に、京都帝国大学で理学士百済教猷氏が発見したもので、第3は1928年10月山崎正光氏が発見したものである、今後我国でも彗星の発見者が増加して発見数の増すことを希望する——。

発見数の増すことを希望する、という文字と、日本での発見は3個であるが、新彗星は山崎氏の1個であるという——。

何か心に火がついたようであった、じりじりと燃焼をはじめ、今日もまだ燃えつづける火が、思えばこの時ついたようであった。

彗星の捜索をはじめるとしても私の望遠鏡は、シングル口径28ミリ、25ミリのラムスデンのアイピースでの手製であった、それでやるしかなかった。

そしてある夜金星のそばに20'ぐらいの細長い尾を持つ光体を観測した、尾があるとすれば彗星にちがいないと思った、思いきって京大花山天文台にハガキを出したのであった。

何日かして返事がきた、そのころ光体はアイピースのキズのゴーストだと分っていた、穴があったら入りたい気持ちのときであった。

——彗星でも発見しようという方が星図をお持ちにならないとは意外です——。

このハガキは、どうやら当時花山天文台におられた、故中村要氏が書いて下さったものではないかといまでも思っている。

神田茂先生には、昭和12年カニンガム彗星が現れたとき、はじめてスケッチを見ていただいた、後年湯河原のお宅をおたづねするきっかけでもあった。

湯河原のお宅の風呂場の少しぬるかった温泉を思い出す——。

